

『林鶴梁日記』と江戸時代後期の絵画—岡本秋暉を中心に—

伊藤紫織（尚美学園大学）

江戸時代後期の儒学者で幕府の代官を務めた林鶴梁（1806～78）は漢学に優れ、漢文による『鶴梁文鈔』が昭和前期まではよく知られていた。天保14年（1843）から文久元年（1861）までの19年間にわたる日記が東京都立中央図書館に残り、翻刻が刊行されている（保田春男編『林鶴梁日記』、日本評論社、2002年）。日記を翻刻した保田氏が『ある文人代官の幕末日記』（吉川弘文館、2009年）において鶴梁が絵画を好み、岡本秋暉らと親しかったことを記すが、その指摘を美術史研究では十分に取り入れることができていない。発表者は秋暉研究においてその重要性に言及したことがあるが（伊藤紫織『江戸時代の唐画』、春風社、2023年）、改めて『林鶴梁日記』に着目し、日記からわかる事象を報告したい。

岡本秋暉（1807～62）は江戸の装剣金工の彫金家石黒政美（？～1860・1861頃）の二男である。秋暉の母は医師と伝える岡本家の出で、その姉妹が小田原藩主大久保忠顕（1760～1803）の側室であった。岡本家は男子を産んだ側室の実家として士分となり、秋暉は岡本家を継いで小田原藩に出仕した。『林鶴梁日記』における秋暉の初出は天保14年1月26日であるが、それ以前からの交流が想定できる。天保14年2月11日には秋暉主催の書画会に肴代を遣わしたり、弘化4年（1847）12月4日に自宅に揮毫させたりと秋暉の足取りを追うことができる。弘化4年の日記の覚書の記述「蓑亀之図、元辺景昭ノ画、佐賀侯蔵幅、文晁一見のよし、秋暉も見度趣。」は、現存する元辺文進「波頭亀舞蝶図」双幅（公益財団法人鍋島報効会徴古館蔵）と対応する。秋暉は願いをかなえたらしく、左幅に倣って「群蝶図」（摘水軒記念文化振興財団蔵）、「灘越蝶図」（ファナック株式会社蔵）を残す。この図様を取り入れた谷文晁が実見していたことも日記が裏付ける。

弘化4年2月25日には宋紫石門下の董九如として知られる旗本井戸弘築が当代の弘道（鉄太郎、ペリー来航時の応接係）の祖父として記され、画家として名が残る弘築の三男董烈だけでなく、弘道の父であるその兄も画をよくし、墨梅を得意としたことが記される。その他、天保14年6月11日、秋暉は鶴梁の紹介で松代藩主真田幸貫を訪ねるが、これは幸貫が鶴梁の庇護者であったことに関わる。松代藩の御用を勤めた絵師三村晴山についての記述も日記にたびたび現れる。また鶴梁は代官としての任地で見た古画についても精力的に記録している。

鶴梁は師、松崎慊堂から「白冊一卷」をもらい受けたのをきっかけに日記を書き起こしたと述べている。『慊堂日曆』の記事が秋暉の師大西圭齋の生没年を伝えたように『林鶴梁日記』は秋暉らの情報を伝えている。一つ一つの事象は些末でも記述を継続的に追ったり、他で明らかになっていることと照合したりすることによって日記から研究に有益な情報を汲み取ることが可能であり、江戸時代後期絵画研究においてこの種の日記を活用していきたい。